

〈研究報告〉

「国語表現」におけるビブリオバトル導入の効果について

龍 本 那津子

（前言）

筆者は平成 22 年 4 月～平成 29 年 3 月の 7 年間、奈良県立登美ヶ丘高等学校教諭として勤務し、本稿はその授業実践の記録に基づいて書かれたものである。本論中に引用する高等学校学習指導要領の文言については、現行のもの（平成 21 年 3 月告示）に従う。

I はじめに

「生きる力」の育成をねらいとした平成 10 年～11 年告示の学習指導要領において、国語科の目標に「伝え合う力を高める」という文言が加えられた⁽¹⁾。この「伝え合う力を高める」という文言は現行の学習指導要領（平成 20～21 年告示）にも受け継がれ、高等学校学習指導要領では、国語科の目標を「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」(傍線筆者)と掲げる。また、平成 29 年 3 月告示の学習指導要領(小学校・中学校)においても国語科の目標の中に「伝え合う力を高め」は受け継がれており、「伝え合う力を高める」ことは、国語科教育の 20 年来的課題としてあっただけでなく、まさにこれからの課題でもある。

近年のスマートフォンの爆発的な普及を背景に、誰もが簡単に自分の思いを発信し、他者と「つながる」ことができるようになった。では、実際のコミュニケーション能力は向上したのだろうか。企業・大学生ともに、社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素として「コミュニケーション力」を挙げているが、企業側は学生に対し、「コミュニケーション力」の不足を感じている⁽²⁾。また平成 24 年度「国語に関する世論調査」では、人の言いたいことが理解できなかった経験がある人の割合は約 67%、自分の言いたいことが伝わらなかった経験がある人の割合は約 63% である。中でも 20 代・30 代はいずれの項目にも 70% 以上が「ある」と回答している。こうした状況を見ると、学校教育はこの 20 年間で本当に「伝え合う力を高める」ことができたのか、疑問に思わざるを得ない。

一方、平成 13 年 12 月には「子どもの読書推進に関する法律」が公布・施行され、「子どもの読書活動の推進」は国民全体の課題である。

筆者は「ビブリオバトル」の導入は「伝え合う力を高めること」と「読書活動の推進」という二つの課題解決に寄与するものであると考える。以下はその実践記録による論考である。

Ⅱ 研究の視点

実際の高等学校の学習活動において「伝え合う力を高める」ことはどれほどできているのだろうか。平成 28 年 12 月の中教審答申⁽³⁾では、

- ・高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと
- ・話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと

などを「長年にわたり指摘されている課題」として挙げ、教育内容の改善・充実を図ろうとしている。

一方、高校生の読書活動の現状はどのようなものであろうか。同答申では、

子供たちの読書活動についても、量的には改善傾向にあるものの、受け身の読書体験にとどまっており、著者の考えや情報を読み解きながら自分の考えを形成していくという、能動的な読書になっていないとの指摘もある。

とし、「小・中学生に比して、高校生の読書活動は、ここ 10 年ほど改善がみられない」ことを課題としている⁽⁴⁾。文科省は、来年度から始まる新たな「子ども読書活動推進計画」の策定に向け有識者会議を設け、平成 29 年 8 月 1 日に初会合を開いた。今回の策定においては、「高校生の読書の活性化」が焦点のひとつとなるという⁽⁵⁾。

筆者が勤務した奈良県立登美ヶ丘高等学校（以下「登美ヶ丘高校」と記す）は全日制普通科の 1 学年 6 クラス、生徒数 720 名程度の中規模校である。学年 6 クラスのうちおおむね 5 クラスが文型、1 クラスが理型を選択する。筆者が在職した平成 22 年度～28 年度の教育課程における「国語表現」の履修状況は以下の通りである。なお、科目名は平成 25 年度までは「国語表現Ⅰ」、平成 26 年度以降は「国語表現」となるが、学習内容は同じである。

平成 22 年度 第 3 学年 文型 2 単位（コースにより選択または必修）

平成 23 年度～28 年度 第 3 学年 文型 2 単位（必修）

「国語表現」の科目の特性上 1 クラスを二つに分割し 1 講座 20 名程度の少人数指導の形式で実施した。なお、文型の生徒は第 1 学年で「国語総合」5 単位、第 2 学年で「現代文 B」3 単位・「古典 B」3 単位、第 3 学年では「国語表現」以外に「現代文 B」3 単位・「古典 B」4 単位を履修させていた。筆者がそれまでに勤務してきた学校のなかでは、国語科の総単位数が比較的多く、国語の学習にとっては有利な条件であったと言えるだろう。

ところで、学習指導要領の「内容の取扱い」を見ると、「国語総合」では「話すこと・聞くことを主とする指導には15～25単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。」とし、「現代文B」では「総合的な言語能力を養うため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことについて相互に密接な関連を図り、効果的に指導するようにする。」とある。

ここで実際の指導を振り返ってみると、「読むこと」の指導や古典文法の習得のための指導、あるいは受験を見据えた指導で手一杯で、「話すこと・聞くこと」の指導に時間を割く余裕はなかった。これは、登美ヶ丘高校だけに限らず、多くの高等学校に共通の事情であろう。こうした事情を踏まえて、登美ヶ丘高校では「話すこと・聞くこと」や「書くこと」を重点的に指導するというねらいで、第3学年に「国語表現」を履修させていた。

「国語表現」の「内容の取扱い」では、「生徒の実態等に応じて、話すこと・聞くこと又は書くことのいずれかに重点を置いて指導することができる。」とするが、筆者が赴任する以前の「国語表現」の授業内容は「書くこと」に重点が置かれていて、「話すこと・聞くこと」の指導に関しては、物足りなさを感じさせるものであった。そこで、「国語表現」の授業企画係となったことを機に「話すこと・聞くこと」の指導を充実させることにした。同時に、文化図書部長として生徒の読書活動を活性化させるという使命をも担っており、この二つを同時に解決すべく平成23年度より「ブックトーク」の単元を設けた。主体的に表現する力や読書への意欲をさらに高めるために、平成25年度～平成27年度に導入したのが「ビブリオバトル」である。

Ⅲ 「ビブリオバトル」導入の経緯

1 「ブックトーク」から「ビブリオバトル」へ

筆者が赴任した平成22年度の「国語表現」においては、読書活動と関わる単元として「本の帯を作る」という単元を設定していた。「本の帯」は最も短い書評であり、生徒の作品をプリントにまとめて配布することにより、結果を共有することができる。「人前で話すことが苦手な生徒」に対する配慮も必要なく、登美ヶ丘高校では、数年来定番の教材となっていた。一定の成果は認められるが、筆者は「話すこと・聞くこと」の指導の時間を増やすという視点から、授業企画係となった平成23年度から「ブックトーク」の項目を加えた。これは当時採択していた教育出版の「国語表現」の教科書⁽⁶⁾に「声の表現」という単元があり、その中の「ステップ4 声の発表会 『私のおススメBOOK』(学習指導内容) ●他者の興味・関心をひく文献の紹介と朗読の工夫について習熟する。」を利用した。授業の概要は以下の通りである。

- ①ワークシート(構成表)の作成。
- ②一人4分(紹介2分、朗読2分)程度の発表。

③発表評価シートにもとづく相互評価。

最初は発表することに戸惑いを感じていた生徒たちもおおむね熱心に取り組んだ。評価表を用いて相互評価を行うことで、「クラスメイトの言葉を受け止め、自分のコメントを書く」という作業を通して「話すこと・聞くこと」の指導に関しては一定の成果を上げることができた。しかし、失敗を恐れて原稿を棒読みしてしまう生徒も少なからずおり、発表者の生の言葉を鍛えるという点では課題が残った。また、聞く側としても評価表と言う形で自分の感想や意見を返すことはできるが、時間的な落差が生じ、発表者の発言を受けてその場で質問をするといったことはできない。双方向のコミュニケーション力を鍛えるという点ではまだ不十分である。

効果的な指導法を模索していたところ、平成 25 年 4 月、一冊の新刊書が目にとまった。谷口忠大氏による『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』（文春新書）⁽⁷⁾ である。一読して状況打破の手がかりになると確信した。当時の学校司書神谷陽子氏（現 奈良県立西和清陵高等学校司書）にも助言を受け、奈良県立図書館では全国の公立図書館としては最も早く、平成 23 年 3 月よりビブリオバトルを開催していることも知った⁽⁸⁾。折しも神谷司書も学校図書館の貸し出し数の伸び悩みへの対策として、学校図書館でのビブリオバトルを考えていたところであった。そこで神谷司書の協力を受け、平成 25 年度の「国語表現」の授業への導入に踏み切り、参考文献を収集し準備を進めた。

2 「ビブリオバトル」の概要

ビブリオバトル (Bibliobattle) は、京都大学から広まった輪読会・読書会、または勉強会の形式で「知的書評合戦」とも呼ばれている。平成 19 年に京都大学情報学研究所共生システム論研究室の谷口忠大氏によって考案され、平成 20 年に谷口氏が立命館大学助教となると、研究室の有志によって運営が続けられた。その後、京都大学の総合人間学部や大阪大学など各地に広がっていった。共生システム論研究室では開始当初より youtube を用いた各発表の公開が行われている。詳細については前掲書『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』を参照されたい。やや専門的な入門書としては、平成 25 年 6 月に発行された『ビブリオバトル入門～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』（ビブリオバトル普及委員会著）⁽⁹⁾ がある。ビブリオバトル公式サイト (<http://www.bibliobattle.jp/>) では、ルールをはじめとした基本的な解説から各地での開催予定など、さまざまな情報を閲覧できる。

また、ビブリオバトルの公式ルールはいたってシンプルなものである。

【公式ルール】（ビブリオバトル公式サイト <http://www.bibliobattle.jp/> より）

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人 5 分間で本を紹介する。

3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

わずかに四つのルールだけで構成されるゲームであり、これだけを見るだけでも問題なく実施できる。大学はもちろん、高校、中学、小学校、書店、図書館、一般企業、地域イベント、就職活動イベント、商店街、留学生との交流、語学教育、そして一般家庭内（家族）と、様々な場で利用されている（注7 谷口・前掲書）。公式サイトによれば、平成25年7月に全47都道府県での開催が確認され、平成29年7月25日現在、全国の公立図書館284館、247大学での実施が確認されたという（ビブリオバトル普及委員会事務局調べ）。

3 ビブリオバトル導入の利点

では、ビブリオバトルを授業に導入することによってどのような効果が期待できるだろうか。ビブリオバトルには以下の補足ルールがある。傍線を付した部分が特に学習指導上の効果が高いと思われる部分である。（傍線筆者）

【ルールの補足】（ビブリオバトル公式サイト <http://www.bibliobattle.jp/> より）

- 1 各発表参加者が自分で読んで面白いと思った本を持ってきて集まる。
 - a 他人が推薦したものでかまわないが、必ず発表者自身が選ぶこと。
 - b それぞれの開催でテーマを設定することは問題ない。
- 2 順番に一人5分でカウントダウンタイマーをまわしながら本を紹介する。
 - a 5分が過ぎた時点でタイムアップとし発表を終了する。
 - b 原則レジュメやプレゼン資料の配布等はせず、できるだけライブ感をもって発表する。
 - c 発表者は必ず5分間を使い切る。
- 3 紹介された本について2～3分のディスカッションを行う。
 - a 発表内容の揚げ足をとったり、批判をするようなことはせず、発表内容でわからなかった点の追加説明や、「どの本を一番読みたくなったか？」の判断を後でするための材料をきく。
 - b 全参加者がその場が楽しい場となるように配慮する。
- 4 全発表参加者に紹介された本の中で「どの本を一番読みたくなったか？」を基準に参加者全員で投票を行い最多票を集めたものを「チャンプ本」として決定する。
 - a 紳士協定として、自分の紹介した本には投票せず、紹介者も他の発表者の本に投票する。
 - b チャンプ本は参加者全員の投票で民主的な投票で決定され、教員や司会者、審査員といった少数権力者により決定されてはならない。参加者は発表参加者、聴講参加

者よりなる。全参加者という場合にはこれらすべてを指す。

まず、「自分で読んで面白いと思った本」「必ず発表者自身が選ぶこと」に関して、発表者が好むと好まざるとに関わらず「必ず本を読まなければならない」のはもちろん、発表する本を選ぶ（選書）の段階で読書の主体としての自己が認識される。さらに「どこが面白いか」を伝えるためには新しく読む本は言うまでもなく、既読書であってもその内容を吟味し、再確認する過程において「深く読む」「何度も読む」という行為が必要となる。

次に、「原則レジュメやプレゼン資料の配布等はせず、できるだけライブ感をもって発表する。」という点に関しては、自分の言葉だけで必要な内容を伝えるための表現力を鍛えることができる。「発表者は必ず5分間を使い切る」ことで、口頭発表のための内容構成力を養い、適切な発声の仕方や話す速度など、口頭表現に必要な知識を体得できるのは言うまでもない。

さらに「2～3分のディスカッション」により、発表者と聞き手の間にコミュニケーションが生まれることで、「話す・聞く」力が双方にはぐくまれる。

加えて、「発表内容の揚げ足をとったり、批判をするようなことはせず、発表内容でわからなかった点の追加説明や、『どの本を一番読みたくなったか?』の判断を後でするための材料をきく。」「全参加者がその場が楽しい場となるように配慮する」の2点に関しては相手に配慮した適切なコミュニケーションのあり方の学習の機会となる。

最後に「『どの本を一番読みたくなったか?』を基準に参加者全員で投票を行い最多票を集めたものを『チャンプ本』として決定する。」という点である。教育の場に競争・優劣を持ち込むことに対しては批判的な見方もあるかもしれない。しかし、「チャンピオン」ではなく「チャンプ本」であることに注目したい。評価されるのは生徒個人ではなく、そのプレゼンであり、「一番読みたくなった本」なのである。ゲーム性を加えることによって生徒間に健全な競争意識・向上心が生まれる。

以上のように、ビブリオバトルの導入は「伝え合う力を高めること」と「読書活動の推進」の両方に寄与するものであると考える。

IV 研究の実際

実際にビブリオバトルを授業に導入するに当たって、対象となる生徒の状況を把握した上で、具体的な学習指導計画の作成および評価規準を措定する必要がある。

1 生徒の状況

登美ヶ丘高校の生徒は、毎年ほぼ全員が進学（主に四年制大学）を希望し、残り数名の

生徒が公務員試験を受けるという状況であり、これは現在も変わっていない。学習意欲は高く、一方ではクラブ活動への参加率がおよそ全校生徒の85%にも上る。総じて明るく、素直で前向きな生徒が多く、これまでの勤務校の生徒たちに比べると、人前で発表することに対する抵抗は少ないように見受けられた。平成23年度入学生までは、入学定員の一部をプレゼン型の特色選抜枠としていたこともあり、生徒たちは「自分の考えを自分の言葉で表現すること」「プレゼンテーション力」の大切さをそれなりに理解していたものと考えられる。平成22年度からの3年間の授業を通して得た手応えから、ビブリオバトルの導入が可能であると判断した。

前述のように、「国語表現」は第3学年文型の生徒5クラスをそれぞれ二つに分割し、10講座で実施した。年度によって違うが、筆者はそのうち1～3講座を担当した。授業企画係として、他の担当者にも指導案と教材を提供し、各講座で実施を要請した。ただ講座によっては、かたくなに発表を拒む生徒や、場面緘黙症のため学校では話せない生徒もいる。その場合には無理をせずに従来型の「本の帯作り」を代案として提示して柔軟に対応した。

2 育成したい言語能力

本単元は年間指導計画において、1学期の「自己紹介」のスピーチに引き続き、二つめの「話す・聞く力」に関わる単元であり、9月中旬をめぐりに実施する。1学期の「スピーチ」の授業で、集団の中で話すための力がある程度は身についたと考えられるが、今回はさらにまとまった内容や自分の考えなどを、その場にふさわしい表現を工夫して的確に相手に伝えるための表現力を身につけることを目的とする。また、発表の際に、話し手に対して、聞き手が質問する学習を組み込むことで、相手意識を明確にし、話し手と聞き手双方の交流の中で学習が効果的に進むように留意する。具体的な評価規準は、学習指導要領「国語表現」の「内容」のうち「ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすること。」「エ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。」に準じて作成した。

3 学習活動の概要

(1) 単元名 「ビブリオバトル～本を通して人を知る・人を通して本を知る」(全4～5時間)

(2) 単元の目標

- ① 自分が薦めたい一冊の本を選び、その魅力を聞き手にわかりやすく伝える工夫をする。
(関心・意欲・態度)
- ② その本の内容に関する情報や自分が感動したことについて、適切な表現を用いて話す力を高める。また、話し手の論点や主張を理解し、表現の工夫などに注意しながら、相手の話を聞く。(話す・聞く能力)

③ 集団の中で自分の考えを伝えるための話し方について、理解を深める。(知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	知識・理解
①目的にふさわしい本を選び、その魅力をわかりやすく伝える工夫をしようとしている。	①話すために必要な情報を確認、整理している。 ②本の紹介に必要な情報を、聞き手に配慮したわかりやすい表現で話している。 ③必要な情報を注意して聞き、適切に評価している。	①適切な発声の仕方や話す速度など、口頭表現に必要な知識について理解している。

(4) 指導と評価の計画

時間	各時間の目標	単元の評価規準	評価方法	学習活動
1	・ビブリオバトルに関する基本的な知識とルールを知る。 口頭表現に必要な知識を知る。 ・聞き手にわかりやすい説明の構想を練る。	知識・理解① 関心・意欲・態度①	行動の観察 行動の観察	・ワークシートを用いて、ビブリオバトルの方法と、よい発表の仕方について学ぶ。
2	・必要な情報を聞き手にわかりやすく正確に伝える。	話す・聞く能力①②	発表の観察・発表の分析	・メモなどは一切見ずに、「自分のおすすめの本」について5分間発表する。
3	・話し手の主張を的確に捉え、不明な点や興味を持った点について質問する。	話す・聞く能力③	行動の観察・発言の分析	・2～3分間の質疑応答を行う。
4	・複数の発表を比較し、わかりやすく説得力のある発表の仕方について理解を深める。	知識・理解① 関心・意欲・態度①	行動の観察・記述の点検	・5人の発表の後に「一番読みたくなった本」に投票し、「チャンプ本」を決める。

4 指導に当たっての工夫等

(1) 教材

教材として必要なものは、各自の好きな本1冊、カウントダウンタイマー、投票用紙である。谷口忠大氏も著書の中で述べているように、カウントダウンタイマーは単に時間を計るだけでなく、経過時間・残り時間を発表者と聞き手が共有することで一体感を高める仕掛けとなる。実際の授業において、残り時間が少なくなると聞き手もハラハラし始め、終了ブザーとともに一斉に拍手がわき起こる、といった光景が何度も見られた。新たな機器を購入する必要はなく、iPadなどのタブレットのアプリを活用するとよい。

「国語表現」におけるビブリオバトル導入の効果について

(2) 事前指導

授業に先立って以下のことを説明しておく。

- ・ビブリオバトルのルールと方法を確実に理解しておくこと。
- ・紹介する本のジャンルは問わない。絵本や、マンガ、写真集なども公式ルールでは認められている。ただし良識の範囲内で選ぶこと。
- ・発表原稿は使わない。あくまでもライブの語りを大切にすること。
- ・紹介したい本が、手元にない、学校にもないという場合は図書室まで相談する。公共図書館に現物貸借を申し込むことができる。

(3) 実施の形態について

実施の形態には二通りの方法がある。

- ① 前に出て、教卓の場所から話す。
- ② 机を片付けて全員で輪になって座り、その中で話す。

プレゼン力が向上するのは①の方法であるが、緊張せずに話せるのは②の方法である。実施する講座の生徒の実態により決めるとよい。

(4) 事後指導

各年度とも、単元の最後に授業改善のための授業アンケートを行った。また、「紹介された本のことを知りたい」という意見を受け、「チャンプ本」に選ばれた本の書誌情報を集約したプリントを作成し、配布した。

5 第2時～第4時(第5時)の指導計画

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入5分	・発表の準備	・本時の発表者と順番の確認 ・授業の流れの確認	・欠席者が出た場合など、臨機応変に対応できるようにしておく。
展開35分	・発表	・「私のおすすめの本」について発表する 〔(5分の発表+2～3分の質疑応答)×5〕	・ワークシート(投票用紙)を配布し、記名させておく ・発表が速やかに行われるように促す。 ・質問が出にくいときは指導者の方からきっかけを作るような質問をする。
まとめ10分	・投票用紙の記入 ・集計 ・結果発表とまとめ	・その日の発表で一番読みたくなった本に○を付ける。 ・「チャンプ本」の決定と発表の評価	・人間関係にとらわれず、発表のみを公正に評価して投票するよう促す。 ・「チャンプ本」だけでなく、本日の発表全体についてコメントする。

V まとめと課題

1 アンケートの結果分析と考察

以下は、平成25年度～27年度の3年間、「ビブリオバトル」授業後のアンケートの結果とその分析である。趣旨に賛同した同僚たちの協力により、より多くのデータを集めることができた。アンケートは個々の生徒の読書指導に役立てることも考えて記名とした。

(1) あなたは授業で学習する以前に「ビブリオバトル」のことを知っていましたか？

	平成25	平成26	平成27	合計	
1 全く知らなかった	53	89	77	219	89.8%
2 言葉は知っていたが、具体的な内容は知らなかった。	1	5	9	15	6.1%
3 よく知っていた。	2	3	5	10	4.1%
人数	56	97	91	244	

まだまだ「ビブリオバトル」への認知度は低いが、徐々に増加傾向にある。「よく知っていた」と答えた生徒は全員が図書委員か、図書室によく足を運んでいる生徒であった。

〔2、3〕と答えた生徒に対しての「『ビブリオバトル』に対してどのようなイメージをいただいていましたか？」という質問の回答には

- ・大学でやっているイメージがあった
- ・本好きの人が好きな本を熱狂的に紹介するというイメージ
- ・おすすめの本を紹介するもの
- ・すごく文学的な取り組みで面白そう
- ・本の説明を、とても詳しくするのが難しそうだと思っていた。
- ・賢い人がやっているイメージ
- ・難しい言葉が飛び交っているのかと思っていた。

などがあり、「難しそうなもの」であるというイメージを持っていたことがうかがわれる。

(3) これまでに授業やホームルーム活動で「ビブリオバトル」をしたことがありますか？

	平成25	平成26	平成27	合計	
1 ある	0	0	2	2	0.8%
2 ない	53	96	87	236	96.7%
無回答	3	1	2	6	2.5%
人数	56	97	91	244	

ほとんどが未経験であった。平成27年度に「ある」と答えた生徒は「中学の国語の授業」を挙げており、学校教育に「ビブリオバトル」が徐々に取り入れられつつあることがわかる。

「国語表現」におけるビブリオバトル導入の効果について

(4) 「ビブリオバトル」のやり方について

	平成25	平成26	平成27	合計	
1 よく理解できた	41	58	72	171	70.1%
2 どちらかという理解できた	14	36	19	69	28.3%
3 あまりよく理解できなかった	1	2	0	3	1.2%
4 全く理解できなかった	0	0	0	0	0.0%
無回答	0	1	0	1	0.4%
人数	56	97	91	244	

98%の生徒が「よく理解できた」「どちらかという理解できた」と回答しており、満足できる状況である。

(5) 「ビブリオバトル」に対するあなたの取り組みはどうでしたか。

	平成25	平成26	平成27	合計	
1 たいへん興味を持って取り組めた	29	40	55	124	50.8%
2 どちらかといえば興味を持って取り組めた	18	43	34	95	38.9%
3 あまり興味を持って取り組めなかった	6	12	2	20	8.2%
4 全く興味を持てなかった。	3	2	0	5	2.0%
人数	56	97	91	244	

ほぼ90%の生徒が「大変興味を持って取り組めた」「どちらかといえば興味を持って取り組めた」と回答しており、おおむね満足できる状況である。

(6) 「ビブリオバトル」の学習はあなたにとって有意義でしたか？

	平成25	平成26	平成27	合計	
1 大変有意義であった	30	48	63	141	57.8%
2 どちらかといえば有意義であった	19	44	24	87	35.7%
3 あまり有意義ではなかった	5	3	4	12	4.9%
4 全く意義がなかった	1	2	0	3	1.2%
無回答	1	0	0	1	0.4%
人数	56	97	91	244	

ほぼ94%の生徒が「大変有意義であった」「どちらかといえば有意義であった」と回答した。特筆すべきは、(5)の質問で「あまり興味を持てなかった」「全く興味を持てなかった」と回答した生徒のうち11名が「大変有意義であった」(1名)「どちらかといえば有意義であった」(10名)と回答していることである。彼らのコメントには「プレゼン力がついた」「人

前で話すことに抵抗がなくなった」「本を読むようになった」などがあり、個人の興味関心に関わらず、ビブリオバトルの効果を客観的に評価していることがわかる。

(7) 「ビブリオバトル」の授業を通して、自分自身に何か変化があったと思いますか？あれば具体的に書いてください。

(8) その他「ビブリオバトル」の授業に対して、感想などを書いてください。

この二つの記述欄に寄せられた回答は内容的に重複しているものが多いので、まとめて記す。回答はおおむね肯定的・好意的なもので、趣旨を大別すると、「人前で話す力がついた」「説明する力がついた」「プレゼン力がついた」「コミュニケーション力が向上した」などのように表現力が向上したことを評価するものと、「本を読むきっかけになった」「本をよく読むようになった」「自分が普段読まないような本に興味を持った」などのように読書への意欲の高まりを示すものの二つに集約できる。紙幅の都合上すべてを掲載することはできないが、代表的なものは以下の通りである。(生徒の記述をそのまま引用)

A 「表現力」の向上に関するもの

- ・自分が考えていることを言葉にするのは難しかったけどそれを努力して伝える力が付いたと思う。
- ・一冊の本について詳しく説明する力がついた。
- ・説明することが、こんなにも難しいと思わず、それを気付かせてくれた。
- ・原稿なしでやったので、とても焦ったけど、自分の言いたいことを伝えることができたので、いい経験になったと思います。
- ・人の前で発表する力が付いたと思う。
- ・高校では、人前に立って発表するという機会が少ないので良い経験だと思った。
- ・決められた時間内に話すことが難しいと分かった。あらかじめ準備しておく大切さを知った。
- ・プレゼンテーションが上手になりたいと思っていた（入試にも必要なことだった）ので、いろんな人のプレゼンを聞いて勉強になったし、良い経験ができたからよかったです。
- ・5分という時間の中で好きな本を紹介するには、文章をまとめる力、わかりやすく説明する力などがあることがわかり鍛えたいなあとと思った。
- ・どうやって自分の考えを伝えるかを考えることを、授業でできていい機会になった。話すときに一工夫して面白いと思ってもらう必要があるとわかった。
- ・自分の紹介したい本をどういうふうにしたら気になるかとか、相手のことを考えることができるようになった。
- ・(40人の学級ではなく)少人数の中で人の話や発表を聞くことや話すことができ、コミュニケーション能力の上達につながったと思った。

「国語表現」におけるビブリオバトル導入の効果について

- ・今回は説明がうまくできなかったので、説明する力をつけて、また、挑戦する機会があればやりたいと思います。
- ・内容と制限時間が決まった中で、人前で話す経験となってよかった。他人の発表から使い方などをつかめるし、参考にできた。

B 「読書」に対する態度の変化に関するもの

- ・本離れをしているので、本を読む良いきっかけとなった。
- ・自分の知らないジャンルの本がたくさんあり、本自体に興味を持つことができ、これから自分の好きな本を持って見つけたいと思った。
- ・いろんな本を読みたくなった。本をあまり読まないけど楽しく読めそうな本がたくさんあるんだなあと思った。
- ・友達が面白いと思った本を知ることができて本当によかった！ビブリオバトルで紹介していた本を2人から借りました！
- ・自分の選んだ作品に対する関心がより深くなった。
- ・もっと本が好きになりました。
- ・本を読むきっかけとなり、本を読むことが増えた。
- ・最近読んだはずなのに詳しくつかめていなかったり、質問で知らなかったこともわかってよかった。

C その他感想など

- ・いろいろな発表の仕方があって面白かった。
- ・いきなり5分間というのは長かったです。
- ・本当に楽しかったです！何回でもやりたい！
- ・とても楽しめた。充実していた。
- ・大変面白かったです。本に関心を持ってました。来年もやった方がいいと思います。
- ・この経験を大学でも活かせばいいなと思った。

以上、アンケートの結果に鑑みて、ビブリオバトル導入の目的は果たされたといえよう。

2 これからの課題

今回のビブリオバトル導入は一定の成果を上げることはできた。しかし、これは単発の活動であり、継続的な取り組みにしていく必要がある。ところがそのための時間確保はなかなか難しい。現行の入試制度の下では、受験に直結しない「国語表現」を開講しない高校も多く、登美ケ丘高校においても平成28年度入学生の教育課程から姿を消した。早期に読書指導を充実させるという観点からも、本来ならば「ビブリオバトル」は1年生の「国語総合」での導入が望ましいが、時間不足との戦いであることは先にも述べたとおりである。限られ

た時間数の中で実施するためには、たとえば5名～8名程度のグループ学習の形態を取るのもよいだろう。あるいは「総合的な学習の時間」で実施することも可能である。

さらに、子どもたちの読書活動を支えるためには学校図書館を充実させることが必要である。実際、筆者が担当してきた生徒たちの多くが、読書活動のほぼすべてを学校図書館の本でまかっていた。「子どもの貧困」が問題となっているが、「本を買えない子どもたち」が読書活動から疎外されてはならない。厳しい財政の中で、学校図書館の運営に携わった筆者は図書費の不足を痛感してきた。育友会（保護者会）へ働きかけて支援を仰ぐこと、公共図書館との連携を図ることなど、あらゆる努力が必要である。

これからは国語科においてもアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点に立った授業改善に取り組んでいくことが求められる。言語活動を充実させ、子どもたちの学びの質を向上させるための手立てのひとつとして、学校教育における「ビブリオバトル」の普及を願ってやまない。

(注)

- (1) 国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
- (2) 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査（平成22年経済産業省）
- (3) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日 中央教育審議会
- (4) 3の「補足資料」47頁
- (5) 『日本教育新聞』平成29年8月21日号 日本教育新聞社
- (6) 『国語表現Ⅰ』改訂版 教育出版株式会社（17教出国Ⅰ009）
なお、この「私のおススメBOOK」の単元は現行の『国語表現』（17教出国表301）や、平成30年度からの『国語表現 改訂版』（17教出国表306）においても踏襲されている。
- (7) 谷口忠大『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』（文春新書）文藝春秋社 2014年4月20日 第1刷
- (8) 公立図書館では初の参加型知的書評合戦「ビブリオバトル」平成23年3月13日（日）（奈良県立図書館情報館イベント情報2011/3/3付けの記事）
- (9) ビブリオバトル普及委員会（著）『ビブリオバトル入門～本を通して人を知る・人を通して本を知る～』一般社団法人 情報科学技術協会 2013年6月20日発行